

〈からだをゆつくり ひらいていくと〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

保育園や小学校にじつくりカメラを据え、子どもたちの驚くべき生命力や芸術性をとらえた作品で知られる野中真理子監督。前作『トントンギコギコ園工の時間』から十一年ぶりに新作を完成した。今度は大人を対象にしたダンスの映画である。「柔軟体操ダンス、ダンス！」のリズミカルなナレーション（松本来夢）の導く、ダンサー／ショーディレクターの村田香織さんのダンスのある暮らしとは。

閉館後のバックステージに、制服を脱ぎTシャツ姿になった若い飼育員が集まる。ダンスといっても、初めから音楽に合わせて歌って踊ってというわけではない。香織さんは、最初彼らの身体が「つまらなさそう」に見えたためにワークショッップを立ち上げたのだという。「ちゃんと立って、ちゃんと声が出るようになれば、あとは何もいらない」と。ワークショッップの手始めは、一見これがダンス？と思える素朴なもの。例えば廊下に張った数本のテープといかに遊ぶか。テープを避けたり、くぐったりまたいだりと自由な遊び方にも個性がはつきり。互いに四苦八苦する姿に大笑いしながらも、ままならぬ自分の身体のカタさを知る。日ごろ見慣れたイルカやペンギンの水中の動きの何となめらかなで美しいこと。別にイルカや魚の真似をするわけではないが、こうした経験を通して、イルカたちを見る目が深まり、共

感から自信にさえつながっていくのかもしれない。実際、ある飼育員は、「本来内気な性格ですが、最近は自分からお客さんに話しかけて説明できるようになりました」とか。

ダンスとは、踊る自分の身体の実感を通して相手と気持ちを通い合わせること。それを香織さんは「ひらく」という。「受け入れる、とかちよつと怖いけど、（自分を）出しちゃうとか、拒否しないと…そういうことです」。イルカショーでも、餌をあげて言うことを聞かせるのではなく、イルカたちと一緒にショーを盛り上げたい、とも。

仕事の合間を縫って、香織さんは九一歳（当時）の母親あーちゃんの介護に通う。寝たきりで認知症のあーちゃんには、むしろ夫（夏海光造カメラマン・製作）の方が好かれていたかも、と振り返る。きりりとした若き日の働く母親あーちゃんと香織さんの写真が母娘の歲月を物語る。四歳で踊り始めて半世紀を過ぎた。八ヶ岳の自家農園で作業着に長靴姿で踊る「タマネギの夢」が楽しい。土の中の眠りから覚め根を伸ばし、だんだん丸く成長するタマネギになりきって踊る。即興で無伴奏だが、見るうちに、何だかタマネギが愛しくなってくる。まさに、いのちの讃歌だ。



『ダンスの時間』

日本映画 (88分)

監督：野中真理子

出演：村田香織、新江ノ島水族館・すみだ水族館のみなさん他
9月17日よりシアター・イメージフォーラムほか
全国順次公開

©2015 Nonaka Mariko Office